

- 4) Can you go to Grandma's house by yourself?
 Can't you go to Grandma's house by yourself?
 You can go to Grandma's house by yourself, can't you?
 You can't go to Grandma's house by yourself, can you?
- 5) Was it Monday yesterday?
 Wasn't it Monday yesterday?
 It was Monday yesterday, wasn't it?
 It wasn't Monday yesterday, was it?
- 6) Were you the tallest boy (girl) in your class last year?
 Weren't you the tallest boy (girl) in your class last year?
 You were the tallest boy (girl) in your class last year, weren't you?
 You weren't the tallest boy (girl) in your class last year, were you?
- 7) Did you take violin lessons when you were five?
 Didn't you take violin lessons when you were five?
 You took violin lessons when you were five, didn't you?
 You didn't take a violin lesson when you were five, did you?
- 8) Could you read a book when you were a baby?
 Couldn't you read a book when you were a baby?
 You could read a book when you were a baby, couldn't you?
 You couldn't read a book when you were a baby, could you?

＜認知能力の発達と表現能力の発達＞

白井純子

中京大学院情報科学研究科

email: junko@sccs.chukyo-u.ac.jp

本稿の目的は、幼児の認知的な能力の発達と表現能力の発達との関係を、二言語(英語・日本語)併用児の発話資料を用いて明らかにすることである。検討項目は、幼児の発達指標となる諸概念の表現である過去表現と疑問詞の二項目である。本稿の研究対象児 Steve (仮名) は、米国で生まれ、生後8ヶ月の時来日し、それ以来日本で生活している男児である。彼は家庭では両親の共通言語である英語を使い、それ以外では日本語を使うことの多い、英語と日本語を同時習得している二言語併用児である。従来の研究 (Clancy, 1985; Mishina, 1997) では、英語でよりも日本語での方が過去表現の習得が早いと示唆されてきたが、本稿の研究対象児 Steve については、二言語における過去を表す表現と疑問詞の使用ないし出現はほぼ同時期で、二言語における両者を含んだ表現の特徴も近似していることが確認され、「二言語併用児は新しく獲得した概念を一方の言語で表現するようになれば、あまり大きな時間的隔たりを見ずに、もう一つの言語においても表現するようになる」という仮説が支持された。幼児が獲得する諸概念のうち認知的な発達に伴って理解される概念を言語化して表現する時期が、言語によって左右されることがほとんどないこと、そして、その時期が幼児自身の認知能力の発達と深く関係していることの二点を、二言語併用児の発話資料を用いながら、これまでより一層明確にした。

Interdependence of Cognitive and Linguistic Development: Evidence from the Development of a Bilingual Child

Shirai Junko

Chukyo University, School of Computer and Cognitive Sciences

The present study is an investigation of the interdependence of cognitive competence and linguistic ability in an English-Japanese bilingual child between the ages of 2;6 and 4;0 years. This study is specifically concerned with the acquisition of expressions for past experiences and wh-type questions in the subject's two languages. The subject of

this case study (called Steve in this report) was born to a Japanese mother and American father in the United States, but moved to Japan at the age of eight months and has been exposed to both English and Japanese since that time. Although previous studies by Clancy (1985) and Mishina (1997) suggested that the Japanese past tense is acquired earlier than the English past tense, Steve was found to have acquired expressions for past experiences in both languages at almost the same time. Moreover, his ability to ask wh-type questions also developed in both Japanese and English almost simultaneously. These results support the hypothesis that when bilingual children acquire new concepts, they tend to express them in both languages simultaneously, thus suggesting a relationship between cognitive development and language acquisition.

はじめに

幼児の言語習得を支える要因として、幼児に対する養育者からの言語入力 (Snow & Ferguson, 1977)、幼児の側からの養育者との能動的なインターアクション(白井他、1999)、幼児自身の成長などが考えられて来た。本稿の目的は、幼児の言語習得を支える要因の一つである幼児の認知的な能力の発達と表現能力の発達との関係を、二言語併用児の発話資料を用いて明らかにすることである。ここでは、「二言語を同時習得中の幼児」を二言語併用児と呼ぶ。つまり、二つの言語が使用されている環境に育ち、その二つの言語を同時に習得している幼児と定義する。

幼児は使用言語によらず、成長に伴って新しく諸概念を獲得し、その獲得した諸概念をその後言語化しようとするものと考えられる。例えば、時間的な概念などの理解は発達に従って進み、ある一定の経験を積んだ発達段階で始めて表現可能な形で把握されるものであると考えられる。二言語併用児の場合も一言語使用児と同様、「過去」などのような時間的な概念などの認知的な発達は、ある年齢(段階) になるまでは理解が進まないと考えられる。この意味で、このような諸概念の理解および表出の時期には幼児の習得中の言語による差、すなわち習得中の言語によって早くなる、または遅くなるなどの区別はないはずであると考えられる。

しかし従来の研究では、英語と日本語の一言語使用児と二言語併用児において過去を表す表現の出現時期を比べた場合、一言語使用児の場合は日本語の一言語使用児の方が早く(Clancy, 1985)、また英語と日本語の二言語併用児の場合は日本語の方が過去を表す表現を早く用いる(Mishina, 1997) と示唆されてきた。一方、認知的な発達に伴って獲得される概念のうち、否定概念について、これらと違った研究成果がある。否定表現の初出は、英語の一言語使用児を対象にしたものと日本語の一言語使用児を対象にした研究があるが、比べてみると、英語の一言語使用児の場合も日本語の一言語使用児の場合でも、否定辞を伴う発話が2才前後というほぼ同じ時期に出現していることが報告されている。英語の一言語使用児を対象にしたブラウン(Brown, 1973)の資料では、否定辞「not」の初出は、Eve が1才9ヵ月、Adam と Sarah は2才3ヵ月に資料の収集を始めた時には否定辞を用い始めている。日本語の一言語使用児による否定の助動詞「ない」の初出は、大久保

(1967)のY児は1才7ヵ月、宮田(1995)のAki児の資料では2才0ヵ月、野地(1973)では2才0ヵ月であった。白井他(1999)で発話資料を収集している KOK 児は、発話資料の収集を始めた1才9ヵ月のときから「ない」を「できない」という形で用いていた。

従って、筆者は、言語習得を支える要因としての認知的な発達という観点から、二言語併用児の言語発達に関し、「二言語併用児は新しく獲得した概念を一方の言語で表現するようになれば、あまり大きな時間的隔たりを見せずに、もう一つの言語においても表現するようになる」という仮説を提起する。本稿では、この仮説を「二言語同時表出仮説」と呼ぶ。

本稿では、従来の研究の問題点を指摘し、その上で筆者自身の収集した日本語と英語の二言語併用児一人の発話資料を分析し、獲得した概念の表出の時期に差があるか否かを検証し、「二言語同時表出仮説」の妥当性について考察する。二言語併用児の資料を用いて、過去などの概念を表す表現の出現時期が二言語においてほぼ同時期であることが実証できれば、幼児の言語習得を支える要因の一つとしての認知的な発達の重要性を、一言語使用児の資料を用いる研究よりも明らかにすることができると思われる。

さらに言語習得を支えている要因の一つとしての認知的な発達の重要性について述べる。検討項目は、幼児の発達指標となる諸概念の表現である過去表現、疑問詞の出現の二項目である。過去表現、疑問表現は、幼児の認知的な発達に伴って表出されるものであり、過去およびもの名前や理由などの特定の事柄を明らかにするための疑問の表出は、英語・日本語ともに言語的に表現される必要がある。これらの二項目の表現について、英語および日本語による表出時期がそれぞれ近いとすると、二言語併用児の言語習得には認知的な発達が大きな役割を占め、言語発達を促しているということを示すことができると考えられる。

先行研究とその問題点

クランシー(Clancy,1985)は、日本語では動詞の屈折辞の使用時期が早いと述べている。これは英語の形態素の出現と比較して述べられているものであるが、それまでの研究を参照し、英語の一言語使用児では、文法的な形態素の出現はMLU¹が2以上の時期(Brown, 1973)、または1;5 から2;0の時期(Bloom et al., 1980)であるのに対し、日本語の一言語使用児ではMLUが1;5以下の時期という非常に早い時期であるとまとめている(426頁)。ただし、この比較によって、英語と日本語との発達が相対的に測れるかどうかは疑問である。英語の文法的な発達の指標となる英語の形態素に相当するものが、日本語では何であるのかがはっきりしないからである。また、幼児の文法発達をMLUを用いて測る場合に、その尺度は使用言語が異なっている場合にも有効かどうかも疑問である。

ミシナ(Mishina, 1997) は統語的分化について論じている章で、二言語併用児が二つの言語を個々に習得している根拠のひとつとして、二言語間に現われる干渉が存在しないことを挙げている。ミシナ(Mishina, 1997) が干渉がないとする根拠は、転移(一つの言語の文法規則がもう一つの言語に取り入れられること) や早期化(一つの言語の文法項目の発達の時期が、もう一つの言語の同様の文法項目の発達の時期に影響され、早くなること)が見られなかったことである。しかし、実際には干渉の有無の判断は極めて難しい。大人の第二言語習得研究の場合には、学習者の母語として確立している言語と目標言語とを比較して干渉の有無を判断するという方法をとることができるが、言語習得中の幼児の場合は、まだ母語として確立したものがないのでこの方法を用いることができない。さらに、言語習得過程だけに現われる特徴的な用法² を用いることがあることも、幼児のことははっきり確立していない段階で干渉の有無を論じることを難しくしている。従って、干渉の有無は二言語を個々に習得している根拠としては説得力を欠くものである。

たとえば、ミシナ (Mishina, 1997) は「英語では否定辞は動詞の前に現われ、日本語では用言³ の後ろに現われるというように、その現われる位置が異なる」(原文54頁、筆者訳)ことを前提とし、資料において英語、日本語それぞれの発話で否定辞の現われている位置が異なっていることから、二言語間に干渉がないとしている。ところが、英語の一言語使用児の習得過程には、否定辞を核文⁴ の前だけでなく、日本語と同様に核文の後にも置くことがみられることが報告されている (Klima & Bellugi, 1966; McNeil & McNeil, 1973)⁵。このことから、否定辞の位置だけでは二言語間の干渉の有無を判断できないことが分かる。

また、英語には過去形が存在するのに対して、日本語には明示的な語形としての独立した過去形は存在しないという違いがある。日本語では助動詞「た」を伴って過去を表現することが可能であるが、助動詞「た」を伴った表現全てが過去を表すわけではない。たとえば、日本語の一言語使用児がまだ一語文生成の時期から用いはじめる「あった」は、何かが「ない(非存在)」ことに対して、その何かが見つかった時に発話されるもので、いわゆる過去ではなく、発見を表現するたである (岩淵他、1968; 秦野、1984、1990; 伊藤、1990)。そこで、幼児が発話した助動詞「た」の意味を理解するには文脈情報が必要となる。詳細は、以下の「二言語併用児の過去表現の発達」において説明する。しかしながら、ミシナ (Mishina, 1997) は彼女の研究対象児の発話した「あった」、「いた」などの助動詞「た」を全て過去形と解釈し、それらの習得が英語の過去形の習得時期よりも早いことを根拠に干渉がないと考えている。ところが、それらの日本語の助動詞「た」で過去を表現していたのかどうか、すなわち、過去を表す表現の習得時期に日本語と英語とでは違いがあったのかどうかは明らかにならないために、干渉がほんとうに存在しなかったのかどうかは分からない。

本稿の目的は、幼児の認知的な能力の発達と、こうした表現能力の発達との関係を、二言語(英語・日本語)併

用児の発話資料を用いてより明らかにすることである。

調査方法と分析

本稿の研究対象児 Steve (仮名) は、1991年に英語と日本語の二言語併用者の父と英語とドイツ語の二言語併用者の母の子として米国で生まれ、生後8カ月の時来日し、それ以来日本で生活している男児である。彼は家庭では両親の共通言語である英語を使い、またそれ以外では日本語を使うことの多い、英語と日本語の二言語併用児である。

筆者は Steve が2才6ヶ月から4才になるまでの1年半にわたり、できる限り週に一回、Steve の家庭または筆者の家で、発話資料の収集(録画もしくは録音)を行った。収集した資料は Steve が中心となって行った遊びの場面での自然発話である。

Steveにとって観察期間の初期である2才6ヶ月から2才10ヶ月までは家庭で日本人である母親と過ごすことがほとんどであり、英語を話す機会に比べて日本語を話す機会があまりなかった。2才11ヶ月からは日本語を話す幼児教室に通うようになり、それ以降は日本語を話す機会がさらにふえてきた。

なお、今回の分析対象としては、Steve が2才6ヶ月から4才までの一年半の観察期間で得られた発話記録のうち、観察期間1年半の各月の一時間分ずつ⁶ を CHILDES (MacWhinney & Snow, 1985) の JCHAT 書式 (Oshima & MacWhinney, 1995) に従って書き起こしたものを用了。

二言語併用児の過去表現の発達

日本語と英語の過去表現

上で述べたように、英語と日本語の過去などを表す表現の発達を考える時、英語と日本語の形態素の違いを考える必要がある。英語には過去形の形態素が存在するので、過去形の出現が過去を表現していると考えられる。しかし、日本語には英語と同じような過去形の形態素は存在しない。助動詞「た」には、過去のほかに、上で述べた「発見」と完了の意味がある。「ちゃった」という形もあるが、これは過去を意味するものではなく、完了を意味する⁷(益岡・田窪、1992)。

本稿では過去と完了を次のように区別する。過去を表す表現とは、発話時点よりも以前のことを述べている場合であり、完了を表す表現とは、現在のことを述べている場合である。(従って、結果残存や経験も含む。) 特に幼児の初期発話において助動詞「た」を伴った形を発話していても、それらの全てが過去を表わす表現とは言えない

ので、過去を表しているかどうかは文脈によって判断する必要がある。

日本語の過去表現

上述のように日本語には英語と同じような過去形の形態素が存在しないので、Steve の2才6ヵ月から2才10ヵ月の発話から助動詞「た」で終わる表現が、過去を表しているかどうかを文脈によって判断し、分類したのが表1である。

助動詞「た」を伴う発話は観察初期の2才6ヵ月から「ちゃった」という形で現われている。「いっちゃた」、「おちちゃった」はともにボールを使って遊んでいた時の発話で、過去の事実の表現ではなく、今現在ボールがここから「行ってしまった」、「落ちてしまった」という完了を意味する表現である。また、2才8ヵ月の時の「あった」、「はいってた」は袋を覗いて中に何かを見つけた時の発話、「もってた」は探していたものを自分が「持っている」ことに気づいた時の発話で、これらはともに発見の「た」である。2才8ヵ月の発話の「きた」は Steve が観察者の方に向かって今走って来たことを、「おちた」は Steve の目の前でボールが落ちたことをそれぞれ表現したものであり、完了の「た」である。「勝った」、「まけた」は観察者とじゃんけんをした時の発話であり、2才10ヵ月の「きれいになった」は、掃除の真似をした時の発話である。すべては発話時点での事実(結果状態)を表現しているものであり、過去について表現しているものではなかった。

過去を表す「た」は2才7ヵ月の時に、形容詞に接続する形で先ず現われた。Steve が家の中を走った後で「はやくかった」と発話したものである。動詞に接続した形で現われたのは、2才10ヵ月の時である。「library いった」、「ほんをもってった」という表現であった。これは「(二日前に) 図書館へ行ったこと」、「本を持っていったこと」の説明であるので、過去を表す表現であることが明らかである。

表 1: 観察児 Steve の発話した「た」形の表現 (2才6ヵ月から2才10ヵ月)

				年齢
				発見
				完了
				過去
	(ちゃった形)	(た形)		

行っちゃった

おちちゃった

2;7

はやかった

2;8

あった

行っちゃった

きた

はいった

おちた

もってた

勝った

まけた

2;9

資料なし

2;10

きれいになった

行った

もってった

すわってた

過去表現の出現

表2は観察児 Steve が2才6ヵ月から2才10ヵ月までの観察期間において発話した英語の過去形と日本語の過去表現との出現を示したものである。観察を始めた2才6ヵ月の時に現れた「finished」という発話は、単独で発話したものと、「finished」と発話したものとがあった。単独の「finished」は、新幹線の玩具を使っの遊びが終わった時の発話で、完了と考えられる。それに対し、「I finished」はそれまでの遊びを終えた時の発話であるが、過去を表すのか完了を表すのかははっきりしない。

Steve による英語の明確な過去形としては、2才8ヵ月の時に「came」が、日本語の過去を表す表現は形容詞に接続する形で2才7ヵ月の時に「はやかった」が、現れている。しかしながら、どちらも一例ずつで、過去を表す表

現が定着しているかどうかはまだ分からない。生産性の低い時期である。それに対し、2才10ヵ月の時の発話では、英語でも日本語でも文脈からはっきりと過去の出来事について語っていることが分かるだけでなく、過去を表す表現の種類が増えていることによって、過去についての表現が豊かになって来ていることが分かる。

表2: 観察児 Steve の英語と日本語の過去表現の出現 (2才6ヵ月から2才10ヵ月)

				年 齢 規 則 変 化 動 詞 化 不

規則変化動詞 過去を表す「た」

2;6 finished

2;7 はやかった

2;8 came

2;9 資料なし

2;10 threwed came 行った

went もってった

また、この2才10ヵ月の時には、「throwed」という形の不規則変化動詞に「-ed」を付加したものが現れている。このような不規則変化動詞の規則動詞化という現象⁸は英語の一言語使用児の、過去表現習得過程に現れるもので、過去を表現するためには「ed」を付加すればよいという規則を発見したという証拠の現れであると考えられる。この意味で、Steveは過去という概念をこの時点までには獲得しているものと考えられる。

また、この2才10ヵ月にはこれまで見て来たように、日本語でも過去を表現していることが分かっている。従って、過去を表す表現については「二言語同時表出仮説」が支持されると考えられる。

疑問表現の発達

疑問詞を用いた表現は、聞き手にある特定の説明を求めるものである。たとえば、ものの名前、ことばの意味、説明、論理、理由、原因、場所、数、時間などを求める表現があり、幼児の場合はそれらの表現を用いるようになるのは、認知的な発達との深い結び付きがある。デヴィリアーズと デヴィリアーズ (de Villiers and de Villiers, 1979) は、

疑問詞を用いて相手に尋ねるのは、文における個々の部分 ...文の主語であったり、目的語であったり、時間的な情報であったり、...についてである。そこで、疑問詞を伴った疑問文に正しく答えられるかどうかということ、子どもが文の異なった構成要素についてどれくらいの知識があるかを示している。(筆者訳)⁹

と述べている。

また、大久保(1967)は、幼児の疑問表現の発達について、次のように述べている。

最初は、事実を知ろうとする単純な質問であるが、次第に現象の原因や関係、事物と事物の比較、作用をみきわめようと志向するようになってくる。その動きが出て来るのは、大体2歳前後から2歳半ばごろで、4歳、5歳、6歳となるにしたがって、質問の内容も複雑さを増し、多岐に渡るようになる。(169頁)

二言語併用児が用いる二言語に、類似した意味の疑問詞がともに存在するとしたら、「二言語同時表出仮説」によれば、それらの疑問詞が二言語で用いられる時期は近いと考えられる。英語と日本語を比較すると、ものの名前をたずねる「what」と「なに」、「why」と「どうして(なんで、なぜ)」という疑問詞の意味は類似したものである。こ

の節では、それらの疑問詞を中心に、二言語併用児が用いる二言語において疑問詞がどのように出現していくのかを考察する。

疑問詞の初出時期と使い方

Steve の発話資料において、英語と日本語の疑問詞の出現と、それぞれの月に使用された疑問詞を、表3に示す。観察を始めた2才6カ月の時に、英語では「what」が、日本語では「なに」が使用されており、2つの言語において、同じような疑問詞を用いた問いを発している。また、この月には、「what」や「なに」が単独で用いられているのではないものの、生成している文は、英語では、「Junko, what's making now?」¹⁰ や、日本語では「なにこれ」のような文である。

2才10カ月には理由を尋ねる「why」と「どうして」がともに発話資料においては初めて現れている。「why」は「why need this one?」という文の形で、「どうして」は単独の形である。

3才4カ月には「who」と「だれ」が初出した。それらは「This is who?」(「これ だれ?」)と言う発話で、旅行の写真を観察者に示している場面で続けて発せられた。

3才5カ月には、場所を尋ねる「where」と「どこ」がともに初めて現れている。「where you want to go?」も「どこいくの?」もともに観察者と一緒に遊んでいる時の発話で、英語は自動車のおもちゃを使って遊びながらどこに行こうかと話し合っている場面で、日本語はその後しばらく経ってから観察者の意志を尋ねている場面で発せられたものである。

3才7カ月には、母親が玩具の自動車を持って来てくれるのを待ちながら、「どんな」を含んだ「どんなくなるまかな?」という表現が、3才8カ月には「how」が事故が起きた場面¹¹を想定しての遊びにおいて、「How shall I do?」という発話が、日本語では飛行機に乗った時にもらった玩具について「どうやってもらったかしら?」という表現が出現した。

これらに対し、出現時期が大きく異なっているのは「which」と「どっち」の一種のみ(英語では3才0カ月、日本語では3才6カ月)である。これらの結果——つまり、6種類の疑問詞のうち、5種類は同じ月に両方の言語に初出したこと——は、「二言語同時表出仮説」を支持するものであると考えられる。

表3: 観察児による英語と日本語の疑問詞の使用 (* 下線部は資料における初出を表す。)

			年齢	英語
			2;6	what*

3;7	what	
	why	どうして どんな どこ
3;8	what	
	why	だれ
	how	どう

考察と今後の課題

以上のように Steve については、二言語における過去を表す表現と疑問詞の使用ないし出現はほぼ同時期で、二言語における両者を含んだ表現の特徴も近似していることが確認され、「二言語併用児は新しく獲得した概念を一つの言語で表現するようになれば、あまり大きな時間的隔たりを見せずに、もう一方の言語においても表現できるようになる」という仮説が支持された。従来、英語でよりも日本語の方が過去表現の習得が早い(Clancy, 1985; Mishina, 1997)と考えられてきた。しかし、一言語使用児も二言語併用児も時間等の諸概念は、ある程度の発達段階にならないと理解ができないという意味では同じであると考えられる。二言語併用児の発話資料を用いながら行った、本稿の研究結果の示唆するところは、幼児が獲得する諸概念のうち認知的な発達に伴って理解される概念を言語化して表現する時期が、言語によって左右されることがほとんどないこと、そして、その時期が幼児自身の認知能力の発達と深く関係していることの二点である。

しかし、「二言語同時表出仮説」には、以下のような問題点があり、これらは今後の課題である。

幼児の言語習得過程は、幼児の認知発達の過程をも反映するものである。すなわち、二言語併用児の言語習得過程の研究は、二言語併用児の認知発達の過程を二言語併用児が用いる二つの言語において研究することと云えよう。人間は言語を用いて概念を伝えようとする。その言語が異なれば、その表現の方法も異なる。これを十分考慮して、はじめて二言語併用児の言語の発達を研究することができると考えられる。特に、二言語併用児が概念を獲得している場合でも、二言語併用児が使用する二つの言語の文法の違いから、その表出時期に大きく差があるものもある。例えば、自分自身や話し相手を指す人称代名詞について考えると、英語では主語の表出が必要とされるのに対し、日本語では主語は明示しなくても良い場合が多いという違いがある。実際に、この文法の違いが反映されているためか、英語の一言語使用児の発話には人称代名詞が早く現われるのに対して、日本語の

一言語使用児の発話では現われる時期が遅いことが報告されている(大嶋、1997)。¹² それに対し、日本語の人称代名詞の使用は、大久保(1967)の Y 児の場合は「ワタシ」の初出が1才10ヵ月、「アナタ」の初出が2才6ヵ月と出現時期にずれがある。宮田(1995)の AKI データの場合は、2才時にはどちらも出現していない。

Steve の発話資料では英語では「I」も「you」も観察を始めた2才6ヵ月から使用しているのに対し、日本語では「ワタシ」を3才2ヵ月から、また、「アンタ」を3才4ヵ月から使用するというように、使用を始める時期に差のあることが分かった。このことから、幼児の言語習得過程は言語表現として形に現われたものだけでは分析できないことが分かる。そのため、幼児の獲得する諸概念のうち、二言語併用児の用いる二つの言語で同じようにその概念が言語化されて出現するものと、出現の仕方が違うものとを分類整理し、二言語併用児の言語習得に関し、さらに明らかにする必要がある。

また、幼児の発話はきわめて短いため、発話状況に関するデータによって発話の意味や意図が決定できる場合も少なくない。ところが、現在共有され、電子化が進んでいる発話データ¹³には、発話状況や発話以外の情報が十分に表記されていない。これは、発話以外の項目をこれまであまり重視して来なかったこと、また、表記の方法が確立していなかったためであると考えられる。幼児の言語発達は言語化された形に現われたものだけでは分析できないこと、また発話データの共有によって幼児言語の研究がより進展すると考えられることから、発話データの入力の方法についても今後さらに検討する必要がある。

本稿の仮説を検証するには、本稿で取り上げた一名の対象児では十分とはいえない。しかし、英語と日本語の二言語併用児の言語習得の研究は少なく、二言語併用児の発話資料として公開され利用できるものはまだないのが現状である。そのため、今後さらに別の二言語併用児の発話資料を収集し、仮説を検証する必要がある。また、これまで収集して来た Steve の発話資料を近い将来 CHILDES に提供し、今後の他の研究者にも役立てたいと考えており、英語と日本語の二言語併用児の発話資料を他の研究者と共有することによって、二言語併用児の言語習得過程を明らかにしてゆきたい。

注

1. Mean length of utterance (平均発話長)
2. 日本語では「あかいの花」、英語では「I love you Daddy not」のような例が挙げられる。
3. ミシナは動詞だけを問題にしているが、日本語では動詞、形容詞、形容動詞の用言を問題にして考えるべきであるので、ここでは用言としてある。
4. 語または語群を指す。
5. McNeil and McNeil (1973) は前者の例として「no drop mittens」を、後者の例として「wear mitten

no」を挙げている(52頁)。

6. 2才9ヵ月時および3才3ヵ月の発話資料の収集は観察児の都合で行っていない。
7. 典型的な例として、現在観察中の日本人女児(KOK 児[白井他、1999]) の2才5ヵ月時の発話に「ちゃーでちゃった」などがある。これは、おもらしをした時に発話されたもので、過去の事実について語っているものではない。
8. 英語の一言語使用児の発話する動詞の過去表現は、1)不規則変化動詞の過去形、2)規則変化動詞の過去形、3)不規則変化動詞の規則動詞化(「-ed」を付加することで過去形を生成)、4)規則、不規則動詞の正しい過去形を用いる、の順である(Brown,1973;Kuczaj-II, 1977, 1978; de Villiers & de Villiers, 1985; Fletcher, 1985) ことが知られている。
9. "The different wh-words all stand for different parts of the sentence, and thus answers to them reveal how much children know about the different components of a sentence" (de Villiers and de Villiers,1979, p.62).
10. 「Junko, what are you making now?」の意味である。
11. この資料を収集したのは関西大地震の直後であった。
12. CHILDES を用いて Brown (1973) による英語の一言語使用児の発話データにあたったところ、3人とも観察を始めた時に既に「I」や「you」を使用している(Eve は1才6ヵ月、Adamと Sarah は2才3ヵ月からの発話資料がある)。
13. 例えば CHILDES で公開されている発話データなど。

引用文献

- Bloom, L., Lifter, K., & Hafitz, J. (1980). Semantics of Verbs and the Development of Verb Inflection in Child Language. *Language*, 56 (2), pp. 386 - 412.
- Brown, R. (1973). *A First Language: The Early Stages*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- Clancy, P. M. (1985). The Acquisition of Japanese. In Slobin., D. A. (Ed.), *The Crosslinguistic Study of*

- Language Acquisition, Vol. 1: The Data*, pp. 373-524. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- de Villiers, J. G. & de Villiers, P. A. (1985). The Acquisition of English. In Slobin, D. I. (Ed.), *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition, Vol. 1: The Data*, pp. 27-139. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- de Villiers, P. A. & de Villiers, J. G. (1979). *Early Language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Fletcher, P. (1985). *A Child's Learning of English*. Oxford: Basil Blackwell.
- 秦野悦子(1984)。「前発話期から発話期における否定表現の展開」。『教育心理学研究』、32(3)、191—205頁。
- _____ (1990)。「初期言語における否定表現の獲得」。『日本語学』、9(12)、45—56頁。
- 伊藤克敏 (1990)。『こどものことば習得と創造』。東京：勁草書房。
- 岩淵悦太郎ほか (1968)。『ことばの誕生——うぶ声から5才まで』。東京：日本放送出版協会。
- Klima, E. S. & Bellugi, U. (1966). Syntactic Regulation in the Speech of Children. In Wales, L. (Ed.), *Psycholinguistics Papers*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Kuczaj-II, S. A. (1977). The Acquisition of Regular and Irregular Past Tense Forms. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 16, pp. 589 - 600.
- _____. (1978). Children's Judgments of Grammatical and Ungrammatical Irregular Past-Tense Verbs. *Child Development*, 49, pp. 319 - 326.
- MacWhinney, B. & Snow, C. (1985). The Child Data Exchange System. *Journal of Child Language*, 12, pp. 271-276.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992)。『基礎日本語文法-改訂版-』。東京：くろしお出版。
- McNeil, D. & McNeil, N. (1973). What Does a Child Mean When He Says 'No'? In Ferguson, C. A. & Slobin, D. I. (Eds.), *Studies of Child Language Development*, pp. 619 - 627. New York, NY: Holt, Rinehart, and Wiston.
- Mishina, S. (1997). Language Separation in Early Bilingual Development: A Longitudinal Study of Japanese/English Bilingual Children. Unpublished Ph.D. Dissertation, University of California, Los Angeles.
- 宮田 Susanne (1995)。「アキコーパス：日本語を獲得する男児の1歳5ヵ月から3歳までの縦断観察による発話データ集」。『愛知淑徳短期大学研究紀要』、34、183—191頁。
- 野地潤家 (1973)。『幼児期の言語生活の実態II』。東京：文化評論出版。
- 大久保愛 (1967)。『幼児言語の発達』。東京：東京堂出版。
- Oshima, Y. & MacWhinney, B. (Eds.). (1995)。『日本語のためのCHILDES マニュアル』。Montreal: McGill University.
- 大嶋百合子(1997)。「ことばの意味の学習に関するニューラルネットワークモデル」。『心理学評論』、40(3)、361—376頁。
- 白井純子、白井英俊、浜崎なおみ、菊池隆典、木畑典子、古田嘉照、渡邊欣一 (1999)。「幼児の「聞き返し」：縦断的事例研究」。『社会言語科学』、1(2)13—22頁。
- Snow, C. E. & Ferguson, C. A. (1977). *Talking to Children: Language Input and Acquisition*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.